



Title	水曜例会：「モンゴル秘史を読む」
Author(s)	内田, 敦之
Citation	モンゴル研究. 2022, 31, p. 58-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102424
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《活動報告》

モンゴル研究会水曜例会：「モンゴル秘史を読む」 (2022年4月15日)

内田 敦之

スタートのいきさつ

学部の授業で『モンゴル秘史(元朝秘史)』四部叢刊本のほんの一部をローマ字転写して日本語訳したことはあったが、残念なことに当時はほとんど関心をもたなかった。『秘史』に関する資料は手元にいくつかあったが、卒業後はほとんど見ることもなく本棚に辛うじて並んでいるだけだった。恥ずかしながら『秘史』をモンゴル語で通読したことがなかったため、いつの頃からか一度はモンゴル語で読んで自らのことばで日本語にしてみたいと考えるようになった。

新型コロナ禍は人びとの暮らしに今も深い影を落とし続けているが、Zoomなどによるリモート・ミーティングが普及したのだけは良かった。長らく途絶えていたモンゴル研究会の水曜例会がZoomで復活することになったからだ。2020年夏、荒井幸康さんが始めたウラジミルツォフ『蒙古社会制度史』の輪読会に何度か参加し、同書に『秘史』と『集史』の引用が多いことにあらためて気づかされることになった。秘史をしっかり読めば、自分がずっと関心をもってきたモンゴル人の価値観の一端にふれられるかも知れないと思われた。

このようなタイミングで内モンゴルにおいてモンゴル語による教育が大きく制限される政策が強行されることになり、世界各地で抗議デモが起こった。ユーラシアを中心に世界中に住んでいるモンゴル人の中で縦書きのモンゴル文字を日常的に用いているのは内モンゴルを含む中国領モンゴルのモンゴル人だけである。内モンゴルのモンゴル語教育が衰退し、この地域のモンゴル人が万一モンゴル語を失うことになれば、世界中のモンゴル人、否、人類が縦書きの文字を失うことにつながるのである。中国領モンゴル以外のモンゴル国、ロシア領のボリヤド・モンゴル(ブリヤート共和国)、ハリマグ(カルムィク共和国)などは20世紀前半までにキリル文字に取替えられているからだ。内モンゴルや世界各地での抗議デモに連携して千葉大学で開催された緊急集会において、内モンゴル出身の研究者から「中国の政策を変えることは難しいだろう。今後は子供たちにモンゴル語やモンゴル文化を伝えるため、『秘史』と『トンガラク・タミル』を活用していきたい」という発言があった。それを聞いて、『秘史』をモンゴル文字で読み直したいという思いがいっそう強くなった。

2020年9月、今岡良子さんと但東町のモンゴル民族博物館に行くことになり、その道中この話をしたところ、「じゃ、水曜例会でみんなで読んでみたら？」と背中を軽く押してくれた。このような経緯で、『秘史』の読書会が2020年10月21日(水)から隔週で始まった。

読書会の実際

読書会が始まった頃、ザハチン、ウールド(エルート)、ボリヤド(ブリヤート)、ホルチン、ハルハなど内モンゴル、モンゴル国から多様な方言話者が参加していた。読書会で使用するテキストにはキ

リル文字を併記しているものの、モンゴル文字の方を重視している。モンゴル国のモンゴル人には敷居が高かったのだろうか、しばらくすると常連のモンゴル人は内モンゴル出身者が大部分を占めるようになった。2021年夏の集中講義でもモンゴル文字と秘史について話し、履修した学生にも呼びかけてみたが、残念ながらまだ参加はない。

読書会では、前回読んだ節をまず朗読してから当日読む予定の節を朗読してもらう。初めの頃は各地の方言で聞くことができたが、近ごろはホルチン方言が中心になっている。学生時代、フルンボイル・シネヘンで陸士卒の Da. ドゴルニマさん宅に短期滞在させてもらい、ボリヤド方言の音楽的な優しい響きにすっかり魅了された。残念ながらこれまでボリヤド方言を身に付ける機会はなかったが、ネットでボリヤド・バスガンによる秘史の朗読を聞いてみた。やっぱりええなあ。一度、読書会でモンゴル文字のテキストをボリヤド方言で読んでもらったが、想像していたよりも難しいようだった。ボリヤドをはじめ各方言には中央方言では使われなくなった古いことば、独特な言い回しや文末表現が使われるからである。Choi. ロブサンジャブ先生が、モンゴル文字の特長として「モンゴル語のどの方言にも偏りなく使える」と書いておられたので、方言話者はモンゴル文字で書かれた文書を自らの方言で自由に読むようなイメージをいだいていたが、ことはそう単純ではなかった。ボリヤド・モンゴル語でかかれた秘史は昔買ったものが手元にあるので、もしオイラド（オイラート）方言の秘史があるなら、ぜひ読んでみたい。

テキストの朗読後、難解な箇所や注目した部分について意見を出し合ったり辞書やネットで調べ合ったりしている。例えば第38節には、*Бодончар алгинч хуулж дунд хээлтэй эмийг барьж “Юун хүн чи?” хэмээн асгав.*（ボドンチャルが先鋒で掠奪し、妊娠5か月の女を捕え、「何族の者か、おまえは」と尋ねた）という件がある。Бодончар という名前の意味について村上正二先生の「『ボドンチャル』とは『ボド bodo（大型の家畜牛・馬を指す）に似たもの』の意か」という解説を手がかりに、үнэгэнцэр, мэнэнцэр, мананцэрなど -чар (-par) の付いた単語によって接尾辞の意味を確認した。また、алгинч という語についてはカザフ・モンゴル語辞典で алгы (1.тэргүүн 2.урд, өмнө) という単語を見つけ、チュルク系の言語で説明できそうなことがわかった。そして、асга- という語について、小沢重男先生が『現代モンゴル語辞典』で「<古>（上の者が下の者に）問う、尋ねる。〔考〕意味は acyyx と同じであるが、古くは acyy- は下の者が上の者に“尋ねる”の意味であった」という解説をされている。通訳時には使い勝手が悪いと、この辞書を何十年も本棚の奥にしまっていたことを猛省した。

読書会には狩猟や遊牧、ボリヤド・モンゴルやオイラド方言、さらに、植物や動物に詳しい研究者も参加しており、幅広い視点からの意見が聞けて毎回とても興味深い。だからこそ、できるだけ様々な関心をもつ、たくさんの人々に参加してもらいたい。読書会は自由でオープンな会なので、遊牧民のゲルを訪ねるように都合のいい時間に10分でも15分でもぶらっとのぞいて、好きなことを言ってスーッと退室してくれてもいいんだけどな。

テキストについて

「秘史を読むならモンゴル文字で」と初めから決めていた。当初はモンゴル国で何度も重版されている Ts. ダムディンスレン先生の現代語訳版をモンゴル文字に転写して読もうかと考えていた。ところが、『秘史』の原文である漢字音訳を現代のモンゴル文字に転写した秘史を読んでみると、ことばや表現の一部が古いものの全体として理解できないほどではないことがわかった。そこで、漢字音訳にで

写真 ツエンド公



きるだけ忠実に、難解な部分は言い替えたり補足してある大モンゴル建国800周年に出版された『秘史』(モンゴル文字版)をテキストにし、筆写できるようフォントも活字体から筆記体に替えた。この時、『秘史』の内容が理解できるよう解説的にことばを補足したり言い換えたりした現代語訳版への私の関心はすっかり薄れてしまっていた。ただ、しばらくするとダムディンスレン先生が『秘史』の元の表現をできるだけ残そうと努めていたのではないかという思いをいたしたことになった。ここにきて、浅い知識で即断することの愚かさにあらためて気づくことになる。

テキストをどうするか試行錯誤している時、「ツエンド公の『秘史』を読んでみたら？」と今岡さんが提案してくれた。『モンゴル研究』12号(1989)、13号(1990)、14号(1991)にその一部が発表された『秘史』のことである。ツエンド公の『秘史』が『モンゴル研究』に出た時、実はその必要性が私にはよく理解できなかった。

ツエンド公(1875～1932)はバルガ・フルンボイル出身のダウール・モンゴル人で、モンゴル語の古語を今に残すダウール語のほか、エウェンキ語、オロチョン語、モンゴル語ができ、幼少よりマンジュ(満洲)語、漢語も学んだ。ボグド・ハーン政権において、マンライバートル・ダムディンスレンとドルノール戦に参戦して軍功を上げ、「ボドロゴト・バートル(戦略に長けた英雄)」の称号を得ている。同政権では、防衛大臣、財務副大臣、外務副大臣などを歴任し、ボグド政権の新法律案を作成したり、キャフタ三国会議に出席したりした。そして、ジャムツアラーノが北京で入手した『秘史』葉徳輝本の転写・翻訳作業に取り組み、1917年10月に完成させた。

手稿のまえがきには「『秘史』は700年前に書かれたため、そのモンゴル語は古く、現代語とはかなり違っている。世界の国や地域のいかなる言語であっても、時間の経過とともに衰退し消滅する危険がある。そこで、モンゴルの古いことばを知り、モンゴルの勇ましい英雄たちの威光が世界にあまねく広がっていることを現代の青少年が知ればもっと勇気が出るのではないかと考え、自らの浅学をも顧みず職務の合間にモンゴル文字によって転写し始めて一年余りで完成した」とあり、大仕事に取り組んだ意気込みが伝わってくる。

ご息女のTs.ハンドスレンさんが1970年、この手稿をレニングラードで発見し出版を望んだが、すでに版を重ねていたダムディンスレン先生の『秘史』との兼合いでかなわず、それを『モンゴル研究』が先駆けて発表したのである。私はウランバートルでハンドスレンさんに何度かお会いする機会があつ

たが、この大切な縁について何も知らず、『秘史』についてお話を聞かせていただく貴重な機会を失っていた。数十年後に自らの無知を呪っている。

ツエンド公の手稿をワードに打ち込んだり（図1）、手稿の写しに小沢・バヤル両先生の『秘史』を参考に手書きしたテキストを併記したり（図2）の試行錯誤をくり返してテキストを準備した。

最初のテキストにはモンゴル文字にラテン文字を併記していたが、すぐにモンゴル国の正書法によるキリル文字に替えた。当初は大モンゴル建国800周年（キリル文字版）の『秘史』をそのまま写していたが、現在は漢字音訳のモンゴル語をできるだけそのままキリル文字で転写するようにしている。

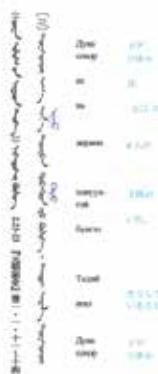


図1

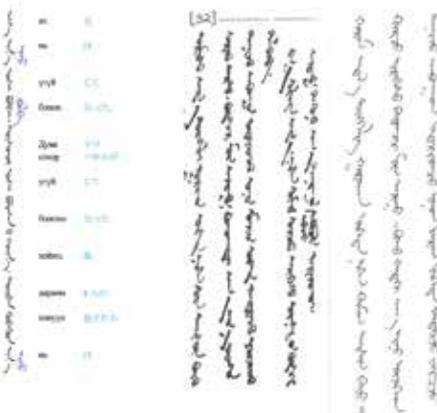


図2



図3

キリル文字は、モンゴル国のモンゴル人にも参加しやすいようにすると同時に、中国領モンゴルのモンゴル人にもキリル文字に親しんでもらう目的がある。モンゴルは20世紀までにユーラシア各地に分断され、使用文字もキリル文字に取替えられた。モンゴル文字を21世紀まで生きた文字として使っているのは、中国領モンゴルのモンゴル人だけである。その功績はもちろん忘れてはならないが、キリル文字モンゴル語も母語の大切な一部である。「母語を守る」と言うなら、モンゴル文字にあぐらをかかず40字足らずのキリル文字（モンゴル国35文字、ボリヤド・モンゴル36文字、ハリマグ39文字）を学び、各方言に残る美しい言い回しを自らのモンゴル語に貪欲に取り込んでいくことも必要ではあるまい。

テキストは最終的に、バヤル先生、ツエンド公のモンゴル文字、小沢先生、栗林均先生のローマ字転写を参考にモンゴル文字とキリル文字で打ち込み、小沢・村上両先生らの日本語訳、ダムディンスレン、エルデンタイ両先生らの現代語訳を参考に日本語訳を付けて準備するようになった（図3）。そして、第53節までは内田がテキストを準備していたが、第54節からは参加者が交替で担当しテキストを準備するようにした。最近は担当者が漢字音訳も併記してくれるため、議論の幅が以前より広がった。テキストに担当者の個性が出て、毎回とても楽しみである。

秘史を読むよろこび

2020年秋、読書会をスタートし、2022年4月時点でテムジンが誕生する第59節までようやくたどり着いた。

世界最強だった13世紀のモンゴルの歴史や文化について、その末裔たちといっしょにモンゴル語で

直接読める喜び。当時のモンゴル人が何を考え、何を大切に生きていたのか、その一端にふれることができるのは何よりも嬉しい。モンゴル語を続けてきてよかったと実感できる瞬間である。

秘史の研究は戦前からの膨大な蓄積があり、すべてフォローすることを考えると気が遠くなりそうである。読書会を「研究会」ではなく「ワークショップ」としてきたのだが、秘史を読み進むうちにそうもいかない気分になっている。ユーラシア大陸を席巻していたモンゴルのパワーが秘史の一言一行にみなぎっていて、適当に見逃してくれそうにない。1985年から出版が始まった小沢先生の『全釈』『全釈続攷』全6巻を今になって揃えることになってしまった。学生時代には開いたこともなかったモスタートルトやコワレフスキ、陸軍省、さらに、カザフ語などチュルク系言語の辞書も少しずつ揃ってきた。辞書は、インターネットからダウンロードしたり西村幹也さんにシェアしてもらった。栗林先生のサイトからは、『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引などの索引(松田孝一先生には貴重な紙版の索引をいただいた)や古いモンゴル語の辞書もシェアできる。これら先人たちの生涯をかけた業績に手を合わせながら使わせてもらっている。あとは自分が十分に使いこなすだけだ。

個人的には、冒頭にもふれたように自らのことばで秘史の日本語訳を作つてみたい。同時に、日本や中国領モンゴルで生まれ育ち、母語としてのモンゴル語を身に付けることが難しかったモンゴル人が母語を学ぶきっかけになるようなテキストができるのか、という思いも秘かに抱いている。

＜参考資料＞(順不同)

小沢重男(1984~89)『元朝秘史全釈』(上中下)、『元朝秘史全釈続攷』(上中下)風間書房。

村上正二(1970~76)『モンゴル秘史チンギス・カン物語』平凡社東洋文庫(全3巻)。

Bayar (1980). Mongyul-un Niyuča Tobčiyan (蒙古秘史、上中下).Kökeqota: 内蒙古人民出版社.

Д.Начин нар (2017). Цэнд гүнгийн хөрвүүлсэн Монголын Нууц Төвчоо. У.Б. .

モンゴル研究会(1989, 1990, 1991)『モンゴル研究』12号, 13号, 14号 モンゴル研究会。

栗林均(2021) 主な著書・論文著作・論文 <http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/articles/>(閲覧日: 10月1日)

吉田順一(2011)『『モンゴル秘史』研究の新たな展開にむけて』吉田順一、早稲田大学モンゴル研究所『モンゴル史研究—現状と展望』明石書店。

森川哲雄(2007)『『元朝秘史』—北アジア世界における初めての年代記』『モンゴル年代記』白帝社。

チョクト(朝克圖)(2011)『『元朝秘史』の世界を理解するために—中国における『元朝秘史』研究の問題を中心に』

吉田順一、早稲田大学モンゴル研究所『モンゴル史研究—現状と展望』明石書店。

Če. Damdijsürüj (1947). Mongyul-un Niyuča Tobčiyan. Ulayanbayatur. Ulus-un keblekü üyildbüri.

Eldengtai, Oyundalai (1984). Mongyul-un Niyuča Tobčiyan-u qaryuyalun qinaysan debter(《蒙古秘史》校勘本) .Kökeqota: 内蒙古人民出版社.

“Mongyul-un Niyuča Tobčiyan”-u songumal eke-yi bolbasurayulqu redakci-yin jöblel(2004).Mongyul-un Niyuča Tobčiyan. У.Б.: “Möjke-yin üsüg” kompani.

Ч.-Р.Намжилов(1990). Монголий Нюуса Тобшо.Улаан-Үдэ.

Nomin-Erdene Batkhyag. 秘史朗読(2020) <https://www.facebook.com/nomio.bathuyag/videos/3977568455604299> (閲覧日: 10月1日).

(うちだ としゆき)